

Title	アンドレ・ジイドの作品における「死」の権力
Sub Title	Le Pouvoir de la mort chez André Gide
Author	森, 香織(Mori, Kaori)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2016
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.21, (2016. ) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20161201-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20161201-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# アンドレ・ジイドの作品における「死」の権力

森 香織

## 1. 序

アンドレ・ジイドにとって、他者という存在は、その自我のあり方を大きく動揺させるものであり、自己を「真実の姿」と信じている姿から逸脱した非・自己へと還元する力を持つものであった<sup>1</sup>。しかしジイドは、その様な他者の存在に対し、不満を漏らすと同時に、他者に阿ろうとする自分にも意識的であり<sup>2</sup>、他者との協調を模索しなければならないとも考えていた<sup>3</sup>。更に、ジイドは自身の日記の中で、繰り返し語りたと思う主題は、「人間が真正正銘の自分になるのを妨げるもの」との「全存在を挙げての闘争」であるとしている<sup>4</sup>。こうした事実を踏まえた上でその作品を見直してみると、それらは、他者という存在によって、「真正正銘の自分」や、そうありたいと願う自己の姿から疎外された登場人物達が、それを回復する為の闘争を繰り返している場であることがわかる。本論では、そうした他者に対して自己に都合のいいイメージを押し付けようとする登場人物と、それに抵抗する登場人物との間の闘争、もしくは、他者の存在によって「自己」（であると信じているもの）から疎外された人物が、その「自己」を回復すべく行う闘争（以下、これを自己／他者におけるイメージ支配を巡る闘争と呼ぶ。）の様相を記述し、ジイドの作品の読解において新たな地平を切り開こうとするものである。

さて、そうした闘争においては、見る、話す、書くという様々な行為が、

---

<sup>1</sup> 1891年10月8日の日記(t. I, pp. 143-144) や、1930年3月21日の日記 (t. II, pp. 192-193) を参照のこと。

<sup>2</sup> 1891年6月10日(t. I, pp. 129-132) の日記を参照のこと。

<sup>3</sup> 例えば1893年9月13日(t. I, pp. 173-174) の日記を参照のこと。

<sup>4</sup> 1930年7月3日の日記(t. II, p. 213) より引用。

登場人物間のイマージュの調整や再構築の為の道具、更には他者への支配力を付与する道具として寄与している。執筆者は今までそうした考えのもと、「顔」や「身体」を見る／見られる／見せるという行為、「講演」や「朗読」といったような、対面性より「声」を聴くことに焦点が当てられた、話す／聴くという行為、若しくは、「日記」を書く／読むという行為について、更には、「身体」がある／ないということが、どの様に他者との闘争の中で機能しているかをそれぞれ分析してきた。そして、他者に対し、その協力の有無に関わらず、絶大な権力を持つ人物達、あるいは、他者からの支配を逃れえている人物達を発見するに至った<sup>5</sup>が、そうした人物達の共通の特徴として、「非・人間的人間」であることが挙げられる可能性が出てきた<sup>6</sup>。

その「非・人間的人間」の一つの在り方として、「死者」もしくは「死体」という存在が考えられるだろう。何故なら、「死者」や「死体」というのは、思考も感情も失った空虚な「肉体」と化した存在であるが、人の形を取っているということのみによって、「人間」と認めることもできるし、一方で、「考える葦」ではなくなった肉塊は、「人間であったもの」(＝「非・人間」)でしかないとも捉えることもできるからである。つまり、何を「人間」と認めるかによって、「人間」とも「人間であったもの」(＝「非・人間」)とも捉えることができる、「人間」と「非・人間」との中間的存在である。よって、本論では、他者の「死」の経験や「死者」という存在が、生きながら「非・

---

<sup>5</sup> 例えば、『鎖を解かれたプロメテ』のゼウス、プロメテ、ボーイ、『贖金使い』のエドゥアールやベルナール、『狭き門』のアリサや『女の学校』及び『ロベール』のエヴリーヌ等が、そうした人物として挙げられる。

<sup>6</sup> 例えば、『鎖を解かれたプロメテ』のゼウスは、人間間の闘争を超越し、彼らの関係性全てを支配する「神」として描かれるという点で「人間」ではないが、一方で、一応人の形をした肉体を持ち、人の言葉をしゃべるという「人間」的側面も持ち合わせ、「非・人間的人間」といえる。また、『贖金使い』のエドゥアールやベルナールに関しては、①「身体」を持たない、②首尾一貫した人格や思考、生き方を持たない変幻自在の人物である、③俯瞰的、語り手的視点を取り、物語世界から一步引いた存在である、という点で、一般的な「人間」とゼウスのような「神」との中間的存在であり、その意味で「非・人間的人間」である。

人間的人間」である人物達と同じく、他者に決定的な影響力を持ち、他者を特定のイメージに還元して支配したり、「自己」からの疎外を経験させたりする存在となっているのではないかと仮定し、作品における登場人物達のイメージ支配を巡る闘争において、いかに「死」というテーマ、もしくは「死者」というあり方が機能しているかを考察することを目的とする。

## 2. 観念としての「死」－闘争の開始

ジイドの作品中において、「死」のテーマを考えると、まず言及しなければならないのは、その物語もしくは語り手の回想が、かなりの頻度で他者の「死」から始まるということである。『狭き門』や『背徳者』では、ジェロームやミシュルの父親の「死」がその回想の始まりに登場し、『女の学校』でもロベールの母親の死が語られる。例えば、『狭き門』の冒頭で、ジェロームは以下のような回想をする。

Ce ne sont pas mes premiers souvenirs que je prétends écrire ici, mais ceux-là seuls qui se rapportent à cette histoire. C'est vraiment l'année de la mort de mon père que je puis dire qu'elle commence. Peut-être ma sensibilité, surexcitée par notre deuil et, sinon par mon propre chagrin, du moins par la vue du chagrin de ma mère, me prédisposait-elle à de nouvelles émotions : j'étais précocement mûri ; lorsque, cette année, nous revîmes à Fongueusemare, Juliette et Robert m'en parurent d'autant plus jeunes, mais, en revoyant Alissa, je compris brusquement que tous deux nous avions cessé d'être enfants.

Oui, c'est bien l'année de la mort de mon père ; (...<sup>7</sup>)

この「死」の描写における特徴は、まず、ジェロームが、父親の死に対して感じていた悲嘆は、自分固有のものではないと言っていることである。自分自身の悲しみを感じることができないジェロームは、この「死」を他人事として捉え、傍観者のような立場を取っている。つまり、この「死」は、「悲しむべき出来事」という観念でしかなく、死者である父親自身によっては、

---

<sup>7</sup> *La Porte Étroite*, p. 813.

その精神や存在を動揺させられてはいないのである。

その一方で、その「死」に際して母親の「悲嘆」を見たことは、彼に大きな影響を与えている。他者の「悲嘆」を見るということは、他者の感情が表出している「顔」を見ることに等しい。表情としての「顔」を他者に見せることが、相手に強い影響を及ぼし、支配／被支配の関係性を結ぶ契機になることについて、本論筆者は以前指摘した<sup>8</sup>。その一例を取り上げるならば、『ロベール』における以下のロベールの回想が適当であろう。

Je lisais au pli de son front, à cette double barre verticale qui commençait de se dessiner entre ses sourcils, une obstination grandissante, un refus qu'elle n'opposait plus seulement aux vérités saintes, mais à tout ce que je pouvais lui dire, à tout ce qui venait de moi. L'ironique scrutation de son regard communiquait aux plus vertueuses manifestations de ma part, je ne sais quoi de contraint, de délibéré, d'affecté. Ou plutôt ce regard opérait sur moi à la manière d'un scalpel, détachant de moi cette action, cette parole ou ce geste, de sorte qu'ils parussent non plus tant nés vraiment de moi qu'adoptés<sup>9</sup>.

ロベールという人物は、常に信心深く公明正大な立派である自分を思い描き、そこに同化することを志向する人物であるが、妻のエヴリーヌの「眉間に引かれ始めた二本の縦線」や「皮肉っぽい探るような視線」という「顔」に表れた感情を見ることによって、それが欺瞞であり偽善であるとする彼女の考えが、自分にとっても本当らしい気がしてくるということを言っている。つまり、エヴリーヌの「顔」を見るという行為は、自己（もしくはそう信じているもの）から疎外する力を持ち、彼女が抱くイマージュに支配される契機となっている。

では、ジェロームが母親の「悲嘆」を見たことは、どのように機能してい

---

<sup>8</sup> 詳しくは、以下の論文を参照のこと。

森 香織、「アンドレ・ジイドにおける『顔』をめぐる闘争」、『慶應義塾大学フランス文学研究室紀要第18号』、2013年、pp.17-32.

<sup>9</sup> Robert, p.675

るだろうか。彼は、その「悲嘆」が彼を敏感にさせ、「新しい感情に動揺しやすく」と語っている。そもそも、ジェロームは、元来自分は他者に興味がなく、特別な関わり合いも持たず、自己目的的に生きていたと認めている<sup>10</sup>。それは、つまり他者と特別な関係性を持っていない、更に言えば、他者とイマージュを巡る闘争を行っていない（そうした闘争が行われていることに気づいていない）ということである。しかし彼は、母親の「悲嘆」を機に覚った「新しい感情」によって、アリサがジュリエット等とは違う特別な存在であると気づき、それによってアリサとの物語が始まったとしている。（彼は父親の「死」の年がアリサとの物語の始まりだと二回繰り返し、強調している。）物語が始まった、ということは、即ち、アリサとそこから特別な関係を結び始めたということである。特別な関係とは、勿論愛情で結ばれた関係である。

さて、他者に対して愛情を持つということは、『贗金使い』のエドゥアールによれば、「自己拡散の反エゴイズムの力<sup>11</sup>」*« force antiégoïste de décentralisation »*を引き起こす要件である。「自己拡散の反エゴイズムの力」とは、『贗金使い』の中で、エドゥアールによって使われる言葉であるが、彼はそれを、「無意識のうちに、それぞれ相手の要求に応じておのれを作り、相手の心の中に見て取った偶像に似ようと努め」、「任意の人になる為に自己から逃れる」ことによって「強烈な生命感」を味わわせる力としている。エドゥアールの場合、ローラとの間にその力が働いていたのだが、その力によって、二人は以下のような関係性であったと語っている。

---

<sup>10</sup>ジェロームは元来の自分の性質について、以下のように語っている。

Sans doute, comme un enfant de quatorze ans, je restais encore indécis, disponible ; mais bientôt mon amour pour Alissa m'enfonça délibérément dans ce sens. Ce fut une subite illumination intérieure à la faveur de laquelle je pris conscience de moi-même : je m'apparus replié, mal éclo, plein d'attente, assez peu soucieux d'autrui, médiocrement entreprenant, et ne rêvant d'autres victoires que celles qu'on obtient sur soi-même. (*La Porte Étroite*, p.822.)

<sup>11</sup> *Les Faux-Monnayeurs*, p. 225

« Laura ne semble pas se douter de sa puissance ; pour moi qui pénètre dans le secret le secret de mon cœur, je sais bien que jusqu'à ce jour, je n'ai pas écrit une ligne qu'elle n'ait indirectement inspirée. (...) J'abandonne mon émotion et ne connais plus que la sienne. Il me paraît même que si elle n'était pas là pour me préciser, ma propre personnalité s'éperdrerait en contours trop vagues ; je ne me rassemble et ne me définis qu'autour d'elle. Par quelle illusion ai-je pu croire jusqu'à ce jour que je la façonnais à ma ressemblance ? Tandis qu'au contraire c'est moi qui me pliais à la sienne ; et je ne le remarquais pas ! Ou plutôt : par un étrange croisement d'influences amoureuses, nos deux êtres, réciproquement, se déformaient. Involontairement, inconsciemment, chacun des deux êtres qui s'aiment se façonne à cette idole qu'il contemple dans le cœur de l'autre...<sup>12</sup>

ここでエドゥアールは、ローラが彼の存在の在り方、思考の在り方を規定する「力」を持っていたとし、一方ローラも自分に対して同じ力を感じていたとしている。そして、お互いが「偶像」に向けて自己を作り変え、相手と同じように感じたり考えたりするように努めた結果、自分一人では何も考えたり感じたりすることができない状態に陥っている。これは、あるトーテムに対して複数の人物が同化し、主体を剥奪される状態としてレヴィ＝ブリュルが「融即<sup>13</sup>」*« participation »*と呼んだ状態に似ている。（よって、本論において、以下こういった関係性は「『自己拡散の反エゴイズムの力』によって『融即』を引き起こしている関係」と呼ぶ。）要するに、他者に愛情を抱くということは、他者の影響力の下に自らをさらし、他者とイマージュの押し付け合いをする、即ちイマージュを巡る闘争関係に従事する契機なのである。

以上の論をまとめると、ジェロームの父親の「死」は、まず、母親に「悲嘆」という大きな感情の表出を起こさせる契機であった。そして、その「悲嘆」は、他者との闘争に無関心または無関係であったジェロームを、アリサとのイマージュ支配を巡る闘争関係へと従事させる準備をさせたのである。

---

<sup>12</sup> *Ibid.*, p. 224

<sup>13</sup> LÉVY-BRUHL, Lucien, *Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures*, Ulan Press, 2012. (『未開社會の思惟』 山田吉彦訳 岩波文庫、1953年)

更に付け加えれば、この「死」は、より単純に、ジェローム達をフォングースマールに引っ越させるという環境の変化の契機でもある。この引っ越しがなければ、ジェロームはアリサと頻繁に会うことはなかったし、アリサの母親の不貞を目撃してアリサへの愛情を自覚することもなかったのだから、その意味でもこの「死」は、ジェロームをアリサとの闘争関係に従事させる間接的な契機として機能しているといえるだろう。要するに、こうした観念として捉えられ、傍観者的立場で経験される「死」は、直接的にその傍観者たる他者に影響を与え、「死者」とその他者との関係性を変えることはないのだが、「死者」ではない別の他者との関係性を結ぶ準備をさせるものである。

ジェロームの父親にとって、自身の「死」は、彼によって何かしらの影響力を他者に与えようと計画されたものではなく、いかなる目的や意図を伴わない。そして、彼とは全く関係のないところで、第三者間にある関係性を与えている。それは、脈絡もなく無目的に齎されたにも関わらず、ダモクレスとコクレスを債権者と債務者という関係性に従事させたゼウスの平手打ちと同じく、「無償の行為」であると言えるだろう。

### 3. 「死体」との対面 — 「他者性」への還元

さて、上記のような観念的な「死」の場面で、その傍観者達が語っているのは、「死」という事件であり、実際の「死体」に直面したことについてはない。では、実際に「死体」を見る場面ではどのようなことが起こっているのだろうか。『贖金使い』に以下のような場面がある。

Gontran lève un regard très doux sur Séraphine. Ses cheveux blonds, qu'il écarte de son front, flottent sur ses tempes. Il a quinze ans ; son visage presque féminin n'exprime que de la tendresse encore, et de l'amour. (...)

Dès que Séraphine l'a laissé seul, Gontran se jette à genoux au pied du lit ; il enfonce son front dans les draps, mais il ne parvient pas à pleurer ; aucun élan ne soulève son cœur. Ses yeux désespérément restent secs. Alors il se relève. Il regarde ce visage impassible. Il voudrait, en ce moment solennel, éprouver je ne sais quoi de sublime et de rare, écouter une communication de l'au-delà, lancer sa pensée

dans des régions éthérées, suprasensibles –mais elle reste accrochée, sa pensée, au ras du sol. Il regarde les mains exsangues du mort, et se demande combien de temps encore les ongles continueront à pousser. Il est choqué de voir ces mains disjointes. Il voudrait les rapprocher, les unir, leur faire tenir le crucifix. (...) Tout de même, il se penche en avant sur le lit. Il saisit le bras du mort le plus éloigné de lui. Le bras est déjà raide et refuse de se prêter. (...) Gontran a presque amené la main à la place qu'il eût fallu ; (...) –le crucifix de travers sur le drap chiffonné, le bras qui retombe inerte à sa place première ; et, dans le grand silence funèbre, il entend soudain un brutal « Nom de Dieu », qui l'emplit d'effroi, comme si quelqu'un d'autre... Il se retourne ; mais non : Il est seul. C'est bien de lui qu'a jailli ce juron sonore, du fond de lui qui n'a jamais juré<sup>14</sup>.

ここでは、愛情と優しさに溢れる少年だったゴントランが、父親の「死体」を見た際に、悲しみや何かしら崇高なものを感じたいと思っているにもかかわらず、乾ききった自分の心を感じている（つまり理想の自己からの疎外を感じている）様子が描かれている。さらに、自らの思い通りにならない「死体」に直面したことによって、乱暴な言葉を吐き、神を冒瀆する自分の出現に驚いている様子が描かれている。その突如出現した「自己」は、最初「他者」として認識されている。つまり、この「死体」との対面によってゴントランに起こったのは、「他性」の顕現である。そしてこの後彼は、信心深く心優しい少年というそれまでの姿から、ボリスを巡る陰謀にも気づかない程勉学以外のことには無関心な人物へと変貌を遂げる（即ち「他者」へ還元される）のだから、この「他性」の顕現が彼に及ぼした影響は絶大である。

ここで、そもそも「死体」とは何かを考えてみると、それは、ミシェル・アンリが「物質的宇宙から引き出された物質的諸過程を利用しつつ、組織しつつ、物理学の諸法則に従って組み合わせつつ、ひとが構築することができる諸物体」という意味で「宇宙の惰性的な一物体」と呼んだ「コール」« corps » であるといえる。ミシェル・アンリは、「肉」« chair »を通して、自分自身を

---

<sup>14</sup> *Les Faux-Monnayeurs*, pp. 205-206.

取り巻くものを感じると同時に自分自身を体験し、その印象や諸現象の把握することによってしか、この「コール」を感じることができないとし、「物自体」*« noumenon »*は不可知であるとしている<sup>15</sup>。しかし、「死体」という状態は、確かにそれを見る人物の「肉」の存在がなければ把握されない現象という点では、彼の言う通りであるといえるが、その「死者」はすでに「肉」を失った「コール」を体験しているとも言える。その体験は、「肉」を必然的に伴う「生きた人間」には不可能なものであり、かつその状態がいかなるものか、「死者」がどのように「コール」を体験しているかを想像することさえ不可能である。また、レヴィナスは「実詞化」*« hypostase »*の後に匿名的な「ある」に直面し、存在の中で意識がその主体を剥奪されることを「恐怖」として捉えているが、「死体」とは、意識の「定位」という「実詞化」されていない「ある」を体現した存在であると言えるだろう。レヴィナスは、その「ある」は、「掌握及び所有として繰り広げられる」とし、「人間の実存がつかみ取られ、拘束されているような力の場」としている<sup>16</sup>。要するに、「死体」が「ある」及び「コール」の体現であるならば、その「死体」は見ている人物に対し、理解不可能性（即ち人知を超えた存在）を予感させ、さらに他者を「ある」あるいは「全体性」へと還元しようとする力の発現の場であると言える。よって、ゴントランの父親の「死体」は、ゴントランを「他性」へと強制的に還元しているのだろう。

#### 4. 恋人の「死」 ー支配からの逃走、支配の試み

さて、これまで「死」または「死体」が、生きている人間に対して、強制的に他者との闘争関係に従事させたり、「他性」に還元したりする力を持つ様子を見てきたが、いずれの場合も、「死者」とのイマージュ支配の在り方

---

<sup>15</sup> HENRY, Michel, *Incarnation – Une philosophie de la chair*, Éditions du Seuil, 2000. (『受肉 : <肉>の哲学』、中敬夫訳、法政大学出版局、2007年。)

<sup>16</sup> LEVINAS, Emmanuel, *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger*, Paris, Vrin, 2<sup>ème</sup> édition, 1967, pp.56-57. (『実存の発見 : フッサールとハイデッガーと共に』、佐藤真理人他訳、ユニベルシタス叢書、法政大学出版局、1996年。)

を変えているものではなく、また、「死者」によってそのイメージの在り方が方向づけられているものではなかった。しかし、他者からのイメージ支配を逃れたり、逆に他者にイメージを押し付けたりする際に、自らが「死者」となる人物が存在する。つまり、「死」が闘争の為の道具として使われ、それによって「死者」自身と他者との関係性が変化するということである。そうした「死」に当たるのは、例えば『田園交響楽』のジェルトリュードや、『狭き門』のアリサ、『女の学校』のエヴリーヌ等のそれである。こうした「死」に共通しているのは、彼女たちが、その「死」によって影響を与えられる人物と、「自己拡散の反エゴイズムの力」による「融即」を引き起こしている関係性にあったということである。『狭き門』におけるジェロームとアリサの間には、愛情が存在しており、それがそうした関係性を引き起こす可能性があることは本論第一節にて述べたとおりであるが、実際彼らがお互いについて語る部分を見てみると、確かにそうした関係性が結ばれていることがわかる。ジェロームは、アリサについて、思慮深く心優しく、崇高な力に導かれた高德な女性として結晶化し、「ひたすら彼女のためを慮って努力をしている<sup>17)</sup>」のだが、そうした彼女との関係性について、次のような理想を語る。

« Oh ! si seulement nous pouvions, nous penchant sur l'âme qu'on aime, voir en elle, comme en un miroir, quelle image nous y posons ! lire en autrui comme en nous-mêmes, mieux qu'en nous-mêmes ! Quelle tranquillité dans la tendresse ! Quelle pureté dans l'amour !... <sup>18)</sup>»

ここでジェロームは、鏡を覗き込むがごとく、アリサの魂と自らの魂が全く同じ姿かたちをすることを、二人の関係の究極の理想形であるとしている。それは、彼女と同じように感じ思考し、一つの偶像に向かって彼女と同化する（＝自己を放棄する）ことであり、それはまさに「自己拡散の反エゴイズ

---

<sup>17)</sup> *La Porte étroite*, p. 822

<sup>18)</sup> *Ibid.*, p. 833

ムの力」によって引き起こされた「融即」であるといえる。一方アリサの方も、「決して愚痴をこぼさないあなた」、「勇気のくじけたところなど想像できないあなた<sup>19)</sup>」とジェロームのことを呼び、常に徳を目指して努力を惜しまない人物であることを彼に期待する（つまり一つの偶像を彼に押し付けている）のだが、そうした期待にジェロームが答えるとき、彼女は次のような手紙を書き送る。

Je fonds de joie en te lisant. J'allais répondre à ta lettre d'Orvieto, quand, à la fois, celle de Pérouse et celle d'Assise sont arrivées. Ma pensée se fait voyageuse ; mon corps seul fait semblant d'être ici ; en vérité, je suis avec toi sur les blanches routes d'Ombrie ; avec toi je pars au matin, regarde avec un œil tout neuf l'aurore... Sur la terrasse de Cortone m'appelais-tu vraiment ? je t'entendais... On avait terriblement soif dans la montagne au-dessus d'Assise ! mais que le verre d'eau du franciscain m'a paru bon ! Ô mon ami ! je regarde à travers toi chaque chose<sup>20)</sup>.

ここで彼女は、ジェロームの手紙を読むことで、彼と同じ体験をし、彼と同じことを感じ、彼の目で物事を見たといっている。即ち、彼女は彼と同化していることを感じ、それに喜びを感じているのである。要するに、彼女の方でもジェロームを結晶化し、その偶像に対して「融即」状態に陥っているといえるだろう。こうした両者の関係性をイマージュ支配における闘争として捉えるならば、お互いがお互いを特定のイマージュに還元しようとしているという意味で相手を支配しようとしており、更にお互いその支配を許容している関係であるといえる。

しかし、彼らの関係は徐々にアリサによって意図的に変更されていく。まず、アリサは、自らの顔立ちや身体の線を作り変える。それまで彼女の「顔」を見ることがなかったジェロームは、改造された「顔」によって初めて彼女

---

<sup>19)</sup> *Ibid.*, p. 862

<sup>20)</sup> *Ibid.*, pp. 860-861

の「顔」を認識し、偶像のアリサと「現実」のアリサの差異を認識する<sup>21</sup>。また、彼女は同時に読む書物も変える。それまで二人は、同じ書物を読むことで同じ思考や感情を持つようとし、魂の同化を感じていた。よって、ジェロームが読まない書物をアリサが読み始めたということは、そうした同化を起こさせないようにすることであり、「融即」状態を終わらせることである<sup>22</sup>。こうした手段は実際、ジェロームがアリサに対して起こしていた結晶化作用を解消させることに成功し、ジェロームはその愛が冷めていくのを感じる。これらは全て、アリサによって意図的に行われるのだが、それは彼を愛さなくなったためではなく、別の目的によるものであったことが以下の彼女の日記からわかる。

Hélas ! Je ne le comprends que trop bien à présent : entre Dieu et lui, il n'est pas d'autre obstacle que moi-même. Si, peut-être, comme il me le dit, son amour pour moi l'inclina vers Dieu tout d'abord, à présent cet amour l'empêche ; il s'attarde à moi, me préfère, et je deviens l'idole qui le retient de s'avancer plus loin dans la vertu. Il faut que l'un de nous deux parvienne ; et désespérant de surmonter dans mon lâche cœur mon amour, permettez-moi, mon Dieu, accordez-moi la force de lui apprendre à ne m'aimer plus ; de manière qu'au prix des miens, je vous apporte ses mérites infiniment préférables... et si mon âme aujourd'hui sanglote de le perdre, n'est-ce pas pour que, plus tard, je le retrouve en Vous<sup>23</sup>...

---

<sup>21</sup> アリサが自らの「顔」を変更することがいかにイマージュ支配に反抗する道具として使われているかについては、註 8 に示した筆者の論を参考のこと。

<sup>22</sup> アリサの日記における以下の部分はその証左である。

J'ai dû bannir de ma bibliothèque...

De livre en livre je le fuis et le retrouve. Même la page que sans lui je découvre, j'entends sa voix encore me la lire. Je n'ai goût qu'à ce qui l'intéresse, et ma pensée a pris la forme de la sienne au point que je ne sais les distinguer pas plus qu'au temps où je pouvais me plaire à les confondre. (*Ibid*, p.898)

<sup>23</sup> *Ibid*, pp.896-897

Jusqu'à présent, je m'étais contentée de le fuir. Ce matin j'ai pu croire que Dieu me donnerait la force de vaincre, et que me dérober sans cesse à la lutte n'allait pas sans lâcheté. Ai-je triomphé ? Jérôme m'aime-t-il un peu moins ?... Hélas ! c'est ce que j'espère, et que je crains tout à la fois... Je ne l'ai jamais aimé davantage.

Et s'il vous faut, Seigneur, pour le sauver de moi, que je me perde, faites <sup>24</sup> !...

ここで彼女は、ジェロームをして神のみを目的として徳を積む人物にすることが何よりも優先される事項であるとし、その為には自分が邪魔者であり、自分を愛さなくなるようにする必要があるとしている。そして、彼を自らが抱く理想像に還元することを、「戦いに勝つ」と表現している。つまり、彼女は、彼との間の「自己拡散の反エゴイズムの力」による「融即」を解消し、彼とのイメージ支配を巡る闘争において、一方的な支配者となる為に、自分に対する彼の愛を態と減らそうとしているのである。

さて、上記の引用においては、アリサが、彼への愛を犠牲にしたことに苦しむだろうと感じており、その苦しみが齎す「死」が、そうした「勝利」の為には必要であるとさえ感じていることが読み取れる。「死」について、アリサは以前にも以下のような会話をジェロームとしている。

« Eh bien, moi, ce matin, j'ai rêvé que j'allais t'épouser si fort que rien, rien ne pourrait nous séparer –que la mort.

-Tu crois que la mort peut séparer ? reprit-elle.

-Je veux dire...

-Je pense qu'elle peut rapprocher, au contraire... oui, rapprocher ce qui a été séparé pendant la vie. <sup>25</sup>»

つまりアリサは、「死」を二人の魂を近づける手段として捉えているといるのである。こうした「死」のとらえ方を元に、彼女のその後の行動を見てみると、病を治すのに必要とされる手術を拒み、遺言を書き、匿名で入院をし、そこを死に場所と定めている。それは「死」が誰にも邪魔されずに遂行され

---

<sup>24</sup> *Ibid*, p.900

<sup>25</sup> *Ibid*, p.831

る為の準備である。ジェロームに対するイマージュ支配を完成させ、神のもとで再び出会うという理想のためには自らの「死」が必要と考え、実際にその「死」を遂行したということは、この「死」は、イマージュを巡る闘争において、確たる支配力を掌握するための手段として使われているということである。

更にアリサは、自らの「死」の原因または目的を明確にジェロームに提示することで、彼が還元されるべきイマージュを特定し、その支配を確たるものにしようとする。その為の手段として選ばれたのは、その死後に自らの日記を彼に提示することである。彼女はその日記に、以下のような文を記している。

A l'instant de jeter au feu ce journal, une sorte d'avertissement m'a retenue ; il m'a paru qu'il ne m'appartenait déjà plus à moi-même ; que je n'avais pas le droit de l'enlever à Jérôme ; que je ne l'avais jamais écrit que pour lui. Mes inquiétudes, mes doutes, me paraissent si dérisoires aujourd'hui que je ne puis plus y attacher d'importance ni croire que Jérôme puisse en être troublé. Mon Dieu, laissez qu'il y surprenne parfois l'accent malhabile d'un cœur désireux jusqu'à la folie de le pousser jusqu'à ce sommet de vertu que je désespérai d'atteindre<sup>26</sup>.

アリサはここで、自らの死後、ジェロームに日記を遺そうと考えており、その目的を、彼女が彼の為に、如何に苦しみ悩んだかを感じ取ってもらうことで、ジェロームを徳に向かわせることである、としている。つまり、彼女の日記は、その死と共に提示されるとき、彼の為に支払われた犠牲の大きさを証明し、彼にその借りを返す為に彼女の希望に忠実であろうとさせる督促状になりえると考えているのである。

実際、その日記の提示と共に遂行された「死」は、ジェロームに対する確たる支配権をアリサに与える。アリサの死後十年以上経った後、ジェロームとジュリエットの間で以下のような会話が交わされる。

---

<sup>26</sup> *Ibid*, p.905

« Quel bon père de famille tu ferais ! dit Juliette en essayant de rire. Qu'attends-tu pour te marier ?

D'avoir oublié bien des choses ; — et je la regardai rougir.

Que tu espères oublier bientôt ?

Que je n'espère pas oublier jamais.

(...)

« Asseyons-nous, dit-elle en se laissant tomber dans un fauteuil. Si je te comprends bien, c'est au souvenir d'Alissa que tu prétends rester fidèle. »

Je fus un instant sans répondre.

« Peut-être plutôt à l'idée qu'elle se faisait de moi... (...)»<sup>27</sup>

ジェロームは未だ、女性を愛することも出来ず、アリサが作り上げたジェローム像に忠実に生きていることを認めている。つまりジェロームは、「神のみを人生の目的とする徳高きジェローム」という人物像に拘束されたままであり、アリサがジェロームに対して絶大な権力を振り続けているのである。

要するに、他者との闘争に参加していた人物が、意図的に「死」を計画するとき、その「死」は、闘争相手であった人物のイメージを確定し、そのイメージへの服従を強要する強力な手段となりえるのである。また、更にそこに、「日記」のような「言葉」を同時に使用すれば、特定のイメージに他者を還元することが可能な手段となりえるのである。

#### 4. 結び

以上、ジイド作品における「死」の他者とのイメージ支配における機能を見てきたが、その論を纏めると、以下のようなことが言えるであろう。まず「死」は、生きている他者に対し、必ず何かしらの影響を与えるものであり、しかもその影響は決定的であるということ。しかし、その「死者」との間に「自己拡散の反エゴイズムの力」による「融即」が起きていたか否かによってその機能の仕方は変わり、それが起きていない場合、その「死」は、「無償の行為」または「不可知性」の体現として経験され、その影響の方向

---

<sup>27</sup> *Ibid.*, pp.907-908.

性は特定できないものの、別の他者との闘争関係に参加させたり、「他性」を顕現させたりすることで、その観察者の存在の在り方を動揺させるということ。一方で「自己拡散の反エゴイズムの力」による「融即」が起きている関係においては、その「死」は、相手への支配力を強める手段として使用することが可能であり、かつ、そこに「言葉」の存在がある場合、自分の意図した通りに相手を特定のイマージュに収束できるということ。この「言葉」というテーマは、朗読の権力を論じた際にも若干触れたものでもある<sup>28</sup>が、イマージュの方向付けに必要な存在であるという可能性について、また別の機会で論じる必要があるだろう。

いずれにせよ、「死者」という「非人間的人間」が絶大な権力を持つということは、「完全なる自己」の実現の為には「非人間的人間」であることが条件であることを裏付けるものであり、そこには、生きている「人間」である限り神の姦計に弄ばれるというジイドの悲観的人生観の現れを見て取ることができる。しかし一方で、こうした考察は、今までその生い立ちや人生観、宗教観と結び付けられてしか論じられることのなかったジイドにおける「死」というテーマ<sup>29</sup>について、自己と他者との闘争の場としての新たな読解を可能にしてくれるであろう。

※引用元は、以下のとおりである。

GIDE, André, *Romans et Récits, Œuvres lyriques et dramatiques t. I*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2009.

GIDE, André, *Romans et Récits, Œuvres lyriques et dramatiques t. II*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2009.

『日記』: GIDE, André, *Journal*, t.I-II, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1996-1997.

※また、日本語訳は、以下の訳に本論筆者が若干の変更を加えたものである。

『アンドレ・ジイド代表作選』、若林真個人訳、慶應義塾大学出版会、1999年。

---

<sup>28</sup> 森 香織、「アンドレ・ジイド作品における声の権力」、『慶應義塾大学フランス文学研究室紀要第20号』、2015年、pp.1-16.

<sup>29</sup> ジイドにおける「死」を分析している研究は例えば以下のようなものがある。

GOULET, Alain, *André Gide : écrire pour vivre*, José Corti, 2002.

RIVALIN-PADIOU, Sidonie, *André Gide : A Corps Défendu*, critiques littéraires, L'Harmattan, 2002.